



大阪方言の音調とその世代間変化

高嶋， 秀

(Degree)

博士（学術）

(Date of Degree)

2025-03-25

(Date of Publication)

2027-03-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第9081号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100496362>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



論 文 内 容 の 要 旨

論 文 題 目 (外国語の場合は、その和訳を併記すること。)

大阪方言の音調とその世代間変化

氏 名 : 高嶋 秀

神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程社会動態専攻

指導教員氏名 (主) 田中 真一 教授
 (副) 岸本 秀樹 教授
 (副) 石山 裕慈 准教授

(注) 4, 0 0 0字程度 (日本語による)。必ずページを付けること。

大阪方言を含む近畿方言は、日本語の諸方言の中でも話者人口が多い変種の一つであるが、その音韻論的・形態音韻論的実態について記述した研究はそれほど多くはない。本論では、大阪方言の特徴である特殊拍アクセントと式音調の実現に焦点を当て、特殊拍アクセントの生起と形態構造・式音調との相互作用、複合形式における複数の式の実現について論じる。

杉藤（1995）による『大阪・東京アクセント音声辞典』に収録されたデータ（65,928 語×話者 6 名）の分析を通じ、大阪方言の複合語における特殊拍アクセントの生起には、形態論的な境界の位置が大きく関係していること、OCP（Obligatory Contour Principle）をはじめとするトーン・アクセントに関する制約の力関係により特殊拍アクセントの保持・非保持が決定されること、複数の式を持つ複合形式の実現は後部要素の長さに大きく左右され、そこには 4 モーラを一つの単位とする作用域の存在が関与していることを主張する。

大阪方言をはじめとする近畿方言には、東京方言などには見られないいくつかの特徴が存在する。

その一つが式の対立である。近畿方言ではアクセントの位置に加え、語頭のピッチが高く始まるか低くはじまるかといった「式」の対立が存在し、前者は「高起式」、後者は「低起式」と呼ばれる。また、近畿方言の複合語では、前部要素の式が後部要素に引き継がれる「式保存」が存在する。

近畿方言のもう一つの特徴が、特殊拍アクセントである。近畿方言は、伝統的に日本語諸方言の中でもモーラ性の強い方言であるとされてきた。「コ[一]チャ」（紅茶）、「イ[ン]ド」のように、引き音「一」や撥音「ン」といった特殊モーラ（特殊拍）が自立モーラと同じようにアクセントを担うことができるのである。しかし近年、近畿方言の特殊拍アクセントが失われつつあることが、いくつかの先行研究で指摘されている。

第 3 章では、どういった語で特殊拍アクセントが保たれやすく、どういった語では保たれにくいのかについて、語全体のモーラ数と形態音韻的な内部構造から検討を行った。まず、アクセント辞典のデータを話者の情報から「戦前世代」と「戦後世代」に分け、モーラ数ごとに「リスク比」という指標をもとに、語末から数えて 3 モーラ目に特殊モーラを持つ複合語における特殊拍アクセントの生起しやすさを調査・分析した。ここでいうリスク比は、特殊拍アクセント生起率を全体のアクセント分布をもとに正規化したものとなる。調査の結果、全体として戦後世代の方が戦前世代よりも特殊モーラへのアクセントを回避する傾向が強いことが確かめられた。先行研究で報告されていた若い世代において特殊拍アクセントが避けられるという傾向は、モーラ数ごとのアクセント型の偏りを考慮しても、なお観察されることが示された。

特殊拍アクセント回避の傾向は、5 モーラ語と 6 モーラ語の間に大きな違いが見られた。この結

果には、調査の対象となった語の形態構造のバリエーションが影響していると思われる。複数の形態素から成る 5 モーラ語の多くは「3 モーラ+2 モーラ」か「2 モーラ+3 モーラ」のいずれかであるが、そのうち、後ろから 3 モーラ目に特殊モーラが来るものは、「3 モーラ+2 モーラ」の組み合わせに限られる。それに対して、6 モーラ語では「4 モーラ+2 モーラ」に加え、「2 モーラ+4 モーラ」でも-3 の位置に特殊モーラが現れうる。取り得る形態構造のバリエーションの違いが、5 モーラ語と 6 モーラ語の結果に違いをもたらした可能性が考えられるのである。

そこで、6 モーラ語をその形態構造から「4 モーラ+2 モーラ」と「2 モーラ+4 モーラ」のものに分け、それぞれについて特殊拍アクセントの生起しやすさを集計した。その結果、特に戦前世代において、同じ 6 モーラ語であっても、「ユカ#メンセキ」（床面積）のように「2 モーラ+4 モーラ」の構造を持つ複合語の方が、「カツドー#リョク」（活動力）のように「4 モーラ+2 モーラ」の構造を持つ複合語よりも特殊拍アクセント回避の傾向が強いことが明らかになった。このことは、語全体のモーラ数が同じでも、その内部構造の違いにより、特殊拍アクセント生起の生起しやすさに大きな違いがあることを意味する。

第 4 章では、「3 モーラ+2 モーラ」の組み合わせにおいて、戦後世代においても比較的特殊拍アクセントが保持されやすい別の要因として、「高起二型」の回避（OCP）が関与していることを指摘する。高起二型とは、高起式かつ語頭から数えて 2 モーラ目にアクセントのあるアクセント型のことであり、近畿方言において一般的に避けられる傾向にあることが知られている。

後部要素が 2 モーラで前部要素が重音節で終わる語全体の長さが 5～6 モーラの複合語を対象に、話者の世代（戦前世代・戦後世代）と入力の式（高起式・低起式）ごとに特殊拍アクセントの生起率の調査を行った。その結果、戦前世代では、どのモーラ数と式の組み合わせでも特殊拍アクセント生起率が特殊拍アクセント回避率を上回っていたのに対し、戦後世代では、基本的には特殊拍アクセント回避を選好するものの、5 モーラで高起式の場合にのみ、特殊拍アクセント生起率が特殊拍アクセント回避率よりも高くなっていた。

戦後世代の結果は、高起式の 5 モーラ語において、特殊拍アクセントという有標な構造（[イショー]#バコ）を回避しようとする、高起二型という別の好ましくない構造（[イショー]ー#バコ）を生じさせてしまうためであると考えられる。高起二型の特異性は、理論的には「出自の異なる H トーン同士が連続してはならない」とする OCP 制約によって説明できる。

これらの結果について、最適性理論の枠組みから分析を行い、特殊拍アクセント生起に見られる世代による方策の違いは、*Tone-H/NonHead（「音節の非主要部（特殊モーラ）にアクセントを置

いてはならない」と CA(μ)（「複合語 (or 合成語) の形態素境界にあるモーラにアクセントを付与せよ。」) という制約の交替に帰着できることを示した。

以上のように、大阪方言における特殊拍アクセントの生起のパターンの世代による変化は、最適性理論の枠組みから OCP をはじめとするトーンやアクセントに関わる制約と、そのリランキングによって説明が可能なのである。

第 5 章では、大阪方言における 2 つの式を持つ一見特異な複合形式の分析を通じて、同方言の音調形成の原理を論じる。大阪方言をはじめとする近畿方言には、「ブルーベリー[ヨーグ]ルト」のように、音調実現の上で完全な複合語と二語連続の中間的な複合形式が存在する。通常、低起・起伏式の語では、「ブルーベリーヨー[グ]ルト」のようにアクセントのあるモーラだけが高いのに対し、こうした複合語では後部要素の初頭から複数のモーラが高く実現されている。つまり、前部要素とは別に、後部要素にも独立した別の式が存在する。前部要素のアクセントが無視されるという点では「一語的」であるが、後部要素の式が生かされるという点では、音韻的に見て完全な一語とは一線を画しているのである。こうした複合形式を「重式複合語」と呼び、一般的な複合語である「単式複合語」とは区別し、その生起要因について調査する。

まず、複合形式の前部要素・後部要素のモーラ数が、重式複合語生起に与える影響について調査を行った。その結果、後部要素の長さが 4 モーラまでの場合には、重式複合語生起率は 5%未満であったのに対して、5 モーラ以上では三分の一以上に増加することが明らかになった。一方で、前部要素の長さによる重式複合語生起率の違いには一貫した傾向が見られなかったことから、重式複合語の生起しやすさには、前部要素ではなく後部要素の長さが関与していることが示された。

後部要素が 4 モーラ以下か 5 モーラ以上かで重式複合語の生起率に違いが見られることは、東京方言の複合語において、後部要素が 5 モーラ以上の場合に複合語全体にそのアクセント情報が残されやすいことと平行的である。アクセントに限らず、日本語一般に 4 モーラを一つの単位とした作用域が存在することは指摘されており、重式複合語の生起にもこうした音韻単位の関与が考えられる。

次に、対象を後部要素が 5 モーラ以上のものに限定し、入力である前部要素の式の影響について検証した。入力の前部が高起式である場合には、多くが高起式の単式複合語として実現するのに対し、入力の前部が低起式の場合には、出力として前部が低起式の重式複合語が選ばれやすいことが分かった。また、入力の前部が低起式のものが単式複合語として実現する場合には、式保存に違反し高起式として実現する割合が高くなっていた。

この結果には、低ピッチ連続の回避が影響していると考えられる。大阪方言において、高起平板の語が連続した場合には、間に低ピッチを挟むことなく続けることができるが、低起平板の語が連続した場合、語句末ごとに高ピッチが挿入される。前部要素が低起式の複合形式においても、重式複合語を形成することで、低ピッチの連続を回避しているものと思われる。

重式複合語の出力形において、入力構成素の式が守られていない場合がある。その傾向は入力の前部要素が高起式の場合に特に強い。しかし、式保存違反という一見例外に見える現象にも一定の方向性があり、それは「低起式＋高起式」への志向性を持っており、その背後には、音調の山を一つにまとめるという動機付けが背後に存在することが考えられる。

大阪方言から特殊拍アクセントが失われつつあること自体は以前より指摘されていたことであるが、本研究では、特殊拍アクセント保持／非保持に関わる音韻論的・形態音韻論的条件について、先行研究では詳細に顧みられていなかった観点から定量的に分析した点、特に式音調との相互作用や OCP の影響について新たに検討したこと、その意義があると言える。

論文審査の結果の要旨

氏 名	高嶋 秀
論 文 題 目	大阪方言の音調とその世代間変化
要 旨	
本論文は、大阪方言におけるアクセントの世代間変化に焦点を当て、記述および理論的側面から分析を試みたものである。『大阪・東京アクセント音声辞典』(杉藤 1996) に収録された、高年話者 (1910-30 年代生まれ) と若年話者 (1960 年代生まれ) それぞれ 3 名によるアクセントパターンの記録データを比較することにより、同方言におけるアクセントの世代間変化を音韻論と形態論の観点から分析している。大阪方言のアクセントについては、従来から、式保存の法則 (和田 1942)、特殊モーラへのアクセント (杉藤 1995, 金水 1997)、高起 2 型アクセントの忌避 (中井 2002) など複数の現象について、記述的一般化を中心に論じられてきた。本論文は、同方言においてよく知られているこれらの現象に焦点を当て、音韻論の立場から新たな記述的一般化を試みるとともに、最適性理論 (Optimality Theory; Prince & Smolensky 1993) の枠組みによる分析も加えている。 本論文は 7 つの章から構成されている。第 1 章は博士論文で扱う研究課題と論文全体の構成について述べている。続く第 2 章では、分析に関係する音韻論と形態論における主要な概念を確認するとともに、分析対象とする大阪方言の主な音韻的特徴について、とくに東京方言と対照させながら提示し、本編で扱う現象の背景および問題の所在について述べている。 第 3 章から第 5 章は、本論文の中核を成す章である。まず第 3 章では、大阪方言に特徴的な特殊モーラへのアクセント付与とその回避の実態を、音韻・形態両面から検討している。高年・若年各 3 名における複合語アクセントのパターンを比較し、若年世代の話者において特殊モーラへのアクセントを回避する方向に進んでいることを示し、同方言における別の現象を扱った先行研究 (金水 1997, 田中 2017) との共通性を確認している。加えて、特殊モーラへのアクセント保持・回避には、語内部の形態構造が関係することを新たに提示している。長さや特殊モーラの位置が共通する語であっても、「ハッシ<u>ン</u>」-リョク (発信-力) のように自由形態素境界 (-) に接する特殊モーラ (下線部) にはアクセント (j) が置かれるのに対し、「ユカ-メ<u>ン</u>セキ」 (床-面積) のようにそれが語内部の拘束形態素境界にある場合、つまり、自由形態素境界には接しない場合には、アクセントが回避される傾向にあることを報告している。その上で、このようなアクセント付与の非対称性が、語における形態的階層と関係することを主張している。 続く第 4 章では、特殊モーラへのアクセント付与と回避における音韻・形態的条件について、とくに高起 2 型 (中井 2002) と呼ばれる有標のピッチ型、そして、式保存 (和田 1942) との関係から分析している。前章と同様、高年話者が一貫して特殊モーラに対しアクセントを付与するのに対し、若年話者では総じてアクセント回避の方向に進むことを確認している。その上で、特殊モーラへのアクセントを回避する傾向にある若年話者においても、その回避の結果として高起 2 型が生じる条件下では、特殊モーラへのアクセントが保持されること、つまり、高起 2 型を回避させる要請が、特殊モーラへのアクセント回避の要請よりも優先度の高い制約として作用することを指摘している。章の後半では、それらの条件間の関係を最適性理論 (Optimality Theory; OT) の枠組みにより制約の優先順位として捉え、理論的な解釈を与えている。特殊モーラへのアクセント回避を *Tone-H / NonHead (音節の非主要部にアクセントを置いてはならない)、高起 2 型回避を OCP(Tone-H) (出自の異なる H ピッチが隣接してはならない)、さらに、式保存の法則を IDENT-IO(RegT) (出力形のトーンは入力形と同じでなければならない) として捉え、両世代のアクセント変化が制約間の優先順位の相対的な変更に還元できるものと主張している。	
主査記載 氏 名	田中真一

第 5 章では、「ブルーベリー-〔ヨーグ〕ルト」のような複合語における特殊なピッチパターンの生起条件を、音韻構造および形態構造の観点から分析している（複合語アクセント規則では、上例は通常「グ」のモーラのみ高くなる）。それらの生起条件として、(1)複合語後部要素が 5 モーラ以上の長さを持つこと、(2)前部要素が低起式（低ピッチで始まる型）であること、(3)前部要素（低ピッチ連続）が長いことを新たに報告している。その上で、それぞれに対する音韻論的解釈を加えている。(1)は、語が 4 モーラを超えると音韻規則の適用が不完全になることに起因し、この点で東京方言における複合語アクセントと並行的であること、(2)は、語に対して音韻的主要部（アクセント）は一つのみ付与されるという、一般的な音韻制約を反映した結果であること、(3)については、低ピッチは長く連続してはならないという、音調に関する一般的制約（OCP）に起因することを指摘している。

第 6 章では、上記第 3～5 章の分析結果について、音韻論の諸制約および大阪方言を扱った先行研究との関係において考察を加えている。第 7 章は論文全体のまとめと今後の課題である。

本論文は、大阪方言において従来から指摘されてきた種々の現象（特殊モーラアクセント、式保存、高起 2 型回避など）についてとくに世代間変化という側面に着目し、辞書コーパスにもとづき新たな知見を提供した点で評価できる。また、先行研究においてさほど扱われて来なかった、現象間の相互作用について分析を加えるとともに、それらの相互作用に関して最適性理論の枠組みから分析を試みたという点で独自性を持つ論文となっている。提示されたデータの音韻・形態的条件が限定されており、本稿で示された知見の汎用性については未解明の部分を残し、今後の課題となっている。また、分析および解釈に検討を要する箇所が散見されるのも事実である。しかしながら、それらの点を差し引いても、本論文が音韻論、形態論、言語変化、方言学などの領域において多くの新しい知見を提供していることには疑いの余地がない。

以上のことから、本審査委員会は全会一致で、高嶋秀氏が博士（学術）の学位を授与されるに足る資格を有するとの結論に至った。

審査委員

区 分	職 名	氏 名	区 分	職 名	氏 名
主 査	教授	田中真一	副 査	教授	ハリソン・リチャード
副 査	教授	岸本秀樹	副 査	元神戸市外国語大学教授	中井幸比古
副 査	教授	澤田治			